

■タイトル■

メキシコの看護教育における社会奉仕実習

■著者■

群馬大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程

■リード■

中南米における医師や看護師などの専門職教育では、卒業前の一定期間、「社会奉仕実習」として、地域や民間の施設での保健医療業務に従事することが義務付けられている。これを最初に制度化したといわれるメキシコでは、学士課程の看護学生の場合、基礎教育課程を終えた後に1年間の看護実習が行われている。

■本文■

社会奉仕実習の実際

メキシコ首都にある某国立大学付属看護師・助産師校は2005年度、国内でも最貧州といわれるチアパス州に23名の実習生を配置した。実習は現地に丸1年間住み込む形で行われるが、配置先には保健医療従事者がおらず、大学教員による巡回指導もない。そこで実習生たちは、それまで学んできた経験的な知識・技術を手がかりに、配置先の施設やその近隣集落の人々への一般的な傷病の手当てや健康教育、母子保健、環境衛生等の保健衛生活動に試行錯誤する。とはいえ、都会育ちの実習生たちにとっては、水道や電気が十分に整備されていない地方での生活や言葉も習慣も違う先住民へのアプローチに戸惑いを隠せない。

社会奉仕実習の目的

メキシコの保健医療教育で行われる社会奉仕実習は、元来、貧困な地域へ医療人材を配置し、都市との医療格差をなくす目的で開始された。保健医療体制が未整備な地方では、必然的に予防を主とした看護業務が中心となる。しかし、近年、都市部の高度化・専門化した保健医療施設での人材要請の高まりと共に、臨床でより専門的な技術を身につけたいと希望する実習生自体も増加し、メキシコ保健省によれば1996年から2002年までの間に地方へ配置された実習生は全体の2割にも満たない等、社会奉仕実習はその目的と現状に矛盾が生じている。そんな中、チアパス州での実習をあえて志願してきた実習生たちは「私たちにとっては未知の文化や人々を知ることこそが重要だ」「ここで学ぶことがある限り、私たちは人材補てんではない」と主張する。しかし「でも、もしここに医師を迎えるための予算がなくて、自分たちがあてがわれたとしたら、それは人材補てんといえるかもしれ

ない」と声を小さくする。

社会奉仕実習後のゆくえ

結局、チアパス州での実習を1年間やり遂げた実習生は15名であり、その半年後、資格試験に合格していたのは半数程度で、現在、学士看護師として満足な仕事や待遇が得られている者は一人もいない。なかには、地方医療へのやりがいや地元住民らへの郷愁から、チアパス州での就職先を探す者もいるが、メキシコでは地方のみならず、都市部でさえも高学歴者が働ける間口は狭い。一方、隣国アメリカでは、増加したヒスパニック系移民に対応できる看護職者が求められており、メキシコ国内での就職をあきらめ、渡米をめざす元実習生も少なくない。実習を通して地方での生活に慣れ親しみ、やがて看護職としてその地域に貢献したいと動機づけられても、国内にその手段がなければ、結局は頭脳流出が起こる。世界看護師協会（ICN）は、看護職の頭脳流出を深刻な国際的課題として取り上げているが、メキシコではこれがどのくらいの割合で起こっているのか、正確には把握されていない。国内の医療の不均衡を是正するはずだった社会奉仕実習が、現在どのように行われ、どこにどのような影響をもたらしているのか、を改めて検証してみる必要がある。



社会奉仕実習の様子